

## 物語り

### 円山東西地下トンネル

気品、繁華、高貴——それが中山高速道路から遠くから見ても、剣潭山に登って近くで見ても、グランドホテルは人々にそのような感じを与えることができます。これはデザイナーの本意であり、このホテルが最初に接待したのは外国の上賓や第一家族の貴賓だったからです。ホテルの最初の経営者は、第一夫人である宋美齡が主催した「敦睦連誼会」でした。作家の李桐豪は、ここでは3日から5日ごとにパーティーがあり、「大使と貴婦人たちが音楽に合わせて踊り、夜明けまで」と書いています。当時、台湾では娯楽活動が全面的に禁止されていました。円山グランドホテルは数少ない昼夜の別なく酒色におぼれる場所でした。そして戦争の影の下で、蒋介石大統領とこれらの貴賓の安全のために、ホテルは東と西の二つの秘密の地下トンネルを建設し、緊急事態に備えて逃走するために使用しました。

現在では観光客が見学することができます。そして、当時のホテルの実際の管理は、もちろん第一家族のメンバーに任されていました。宋美齡が指名した総支配人は、彼女自身の姪である孔令偉であり、元行政院長の孔祥熙の次女であり、孔宋二大政治と商人家族は婚姻を通じて締結した後の子孫でした。彼女は「孔二」というニックネームで知られており、外部の人々は彼女の性格を強引で、第一夫人と直接連絡を取ることができ、そのため常にグランドホテルの運営方向を主導していると述べています。また、当時の保守的な社会の雰囲気の中で、孔令偉は男性のスーツを着るのが好きで、葉巻愛好家で、終生未婚でした。彼女は権力者の家庭で生まれ、当時は非典型的な性別の傾向で公に現れることができる数少ない女性でした。

## 台湾民衆党旧本部所在地

大同区のこの天水路は何の変哲もないように見えますが、台北市の多くの街と同じように、ビルが立ち並び、歩道にはバイクが所々に駐車されています。しかし、もし天水路の番地奇数側を歩くなら、45番の門番に注意してみてください。思いもよらないかもしれませんが、歴史上、台湾人が結成した最初の政党である台湾民衆党の本部はかつてここにありました。1927年、蔣渭水、林献堂、李応章などの知識人たちは、「政治、経済、社会」の三つの自由という大きな夢のために、党を結成しました。彼らは政治的に植民地主義者の専制に対抗し、農民や労働者などの階級のために経済的な公平を求め、また、アヘンなどの社会の悪習を根絶することを提唱しました。当時、総督府は一度台湾民衆党という政党を認めましたが、4年も経たないうちに心変わりし、警察を派遣して党员大会の現場に強行突入し、党の指導層を逮捕しました——現在足元に踏んでいる土地は、当時、台湾民衆党の16人の抵抗者が警察に連行された現場です。そして、党の代表であった蔣渭水は逮捕後、半年も経たずに亡くなり、わずか40歳で亡くなりました。台湾民衆党の本部はすでに解体されていますが、ここに立っていると、蔣渭水氏の名言、「同胞よ、団結せよ。団結こそ真の力だ」を思い起こすことができます。

## 殷海光旧居

静かで小さな温州街 18 巷 16 弄は、何度も曲がりくねった道を通ってやっと到着できる路地 です。しかし、約 60 年前、この路地には常に 2 つのグループが訪れていました。一つは思考力に優れた若者たちで、殷海光氏に哲学や政治情勢について教えを請うために訪れていました。もう一つは軍隊及び警察の特務で、殷海光氏や他の出入りする人々を監視し、尾行していました。殷海光氏は自由主義を提唱した哲学者であり、元々は近隣の台湾大学で教鞭をとっていました。1960 年、異議を唱える雑誌『自由中国』で記事を書き、雷震などと共に野党の結成を提唱したため、政府に封殺され、大学での教職を続けることができなくなり、著作も禁止され、生涯監視されることになりました。それにもかかわらず、殷氏はこの小さな家で真剣に考え、執筆を続け、1969 年に病死するまでその姿勢を貫きました。彼が政府に封殺された原因となった記事、「大江東流止まらず」では、殷海光氏は自由、民主主義、人権といった合理的な願望は必ず実現すると述べており、少数の人が止められるわけではないと言及した。殷海光氏が生きている間にこれらの願望が実現することはありませんでしたが、今日、私たちは自由に、監視されることなく、この狭い静かな路地に入り、旧居で自由の闘士に敬意を表すことができます。

## 自由巷

台湾の民主運動の時間軸において、鄭南榕氏の地位はかけがえのないのです。この幅6メートルの路地は、鄭南榕氏が毎日雑誌社に通うための唯一の通路であり、彼が最終的に自焚して殉道した場所でもあります。1984年3月から1989年4月まで、雑誌社で働く日であれば、鄭南榕氏はこの路地の11番の番地プレートに立ち、ドアを開けて3階に上がり、総編集室に入ります。彼が創刊した週刊誌『自由時代』は、常に時政を批判する記事を掲載していました——戒厳体制の解除と警備本部の解散を求め、台湾独立を主張していました。これらの記事の内容は、当時の政府の限界に衝突しました。記者や寄稿者が言論で罪に問われるのを避けるため、『自由時代』の目次ではしばしば寄稿者の名前を隠し、「本誌の文責はすべて総編集者の鄭南榕が負う」と記載していました。この路地は、ある日、鄭南榕氏を強制的に拘束するための配置の場所でした。1989年4月7日の午前、路地周辺には数百人の警察が溢れ、消防車も事前に路地の入り口に停車して待機しました。鄭南榕が告発された罪名は「反乱」で、彼が『自由時代』週刊誌に法律学者が書いた『台湾共和国憲法草案』を掲載したからです。鄭南榕氏は、このような言論の自由を拘束する罪を拒否し、出頭することを拒否し、総編集室に自ら閉じ込めました。警察が雑誌社的大门に強行突入し、鉄門を突破しようとしたとき、鄭南榕氏はガソリンを引火させて自焚しました。——現在、11番3階は鄭南榕基金会の所在地であり、当時の総編集室が焼失した様子がそのまま残っています。

## 長慶ガジュマルの木 / 廟

多くの台北市民が古亭と聞くと、頭に浮かぶのは、台北MRT駅の外に立ち並ぶ高層ビルのある和平西路かもしれません。しかし、和平西路から少し曲がって行くと、晋江街に入ります。繁華街の和平西路とは異なり、晋江街沿いの民宅はほとんどが4、5階建てで、騒々しい車の音や人声は少ないです。そして、晋江街に入ると、福德爺長慶廟という土地公を祀る寺に出会います。廟の裏には、幹の周囲が10メートルに達する古いガジュマルの木があり、樹齢は250年以上と信じられています。その下ではよく地域の住民が集まって世間話をしています。多くの人々が知らないのは、この廟が実は歴史上の「古亭庄」の中心であり、清朝に福建省泉州から移住した人々が開墾したところだということです。古亭庄の元々の集落の規模はそれほど大きくはなく、瑠公圳などの用水路が開削され、まず景美一帯が開発され、それに伴って近くの古亭の人口も次第に増えていきました。そして、この廟は、これらの開墾者たちの信仰の中心でした。同時に、この廟は、民族の協力と共生の証でもあります。第二次大戦後、桃園苗栗一帯から多くの客家人が台北に移住し、その中には古亭に定住した人々も多く、彼らが結成した「伯公会」も積極的に長慶宮の修復や祭祀に参加しました。また、一部の外省人は元々南機場地区に配置されていましたが、彼らの子供たちが成長した後、近くの古亭で不動産を購入し、それにより長慶廟の信者になる人々もいました——この地のすべての住民、民族を問わず、古いガジュマルの木の下で日陰を得て、長慶廟に庇護を求めることができます。

## 北投兒童樂園

台北 MRT 北投駅から台北 MRT 新北投駅まで歩いて行くと、途中には多くの温泉旅館があり、地元の人々に愛されている公衆浴場もあります。冬が来ると、北投は台北市民が寒さから逃れるための第一選択肢となります。

日本時代には、人々はすでに北投での温泉体験を深く愛していました。現在の北投兒童樂園は、当時の公衆浴場の付属施設で、大人が温泉を楽しんでいる間、子供たちを隣の公園で遊ばせることができました。百年の歳月を経て、幼い子供たちは一瞬で白髪の老人になりましたが、彼らがかつて滑った砥石の滑り台は今でも公園の中にあり、忠実に北投の住民たちを、週末ごとに見守り続けています。

同じく百年の歴史を持ち、公園の周囲に日本人が当初植えた熱帯植物も含まれています。これらの熱帯情緒あふれる植物は、植民地主義者たちが「南国」に対して抱いていた想像から由来しています。現在では、植民地主義者たちは去りましたが、硫黄の匂いが依然として北投の空気に漂っています。

## 和興炭坑

鉱山を思うと、おそらく古い映画の中で世離れた村を思い浮かべるでしょう。山道や台車があり、一年中雲霧が立ち込めています。繁華な信義区にも、こんな古い炭坑があることは想像もつきません！

まずは近くの台北医科大学の吳興商圈で何か食べてから、自転車で15～20分か、徒歩で約30～40分で、小さな坂を見てから前に進むと、和興炭坑に到着できます。日本統治末期に建てられたこの炭鉱は、1970年代に採掘中止で廃棄されたが、幸いにも市政府の整備と計画により、テーマパークになりました。公園内には炭坑の状況が展示されており、採掘過程の紹介もあります。また、コウモリ洞窟もあり、天井にぶら下がっているこれらの哺乳類の遠い親戚に親しむ機会もあります。自然景観に興味がある方は、洞窟内の鍾乳石や、斜面上の土石流整備の各工法にも注目してみてください。

この小さな炭坑はそれほど大きくはありませんが、かつての鉱業の繁栄を思い馳せることができます。炭坑を見学した後は、近くの四獸山歩道に行って、探訪の旅を楽しむこともできます！

PS.和興炭坑は信義区六合里の範囲内にありますが、ご存知でしたか？近くの泰合里にも、徳興炭坑があり、里長は熱心に解説ガイド予約サービスを提供しています。

## 五份上溪図

毎日のラッシュアワーには、内湖と汐止の間を行き来する人がたくさんいます。多分あなたもその中の一人かもしれません。

もしそうであれば、次回内湖と汐止の境界を通り過ぎる際は、この天然の市界である内溝溪をよく見てください。台北市政府は生態工法で内溝溪を改造し、地元の生態環境を再生することに成功しました。ここはすでに緑の陰と虫の鳴き声、鳥のさえずりがある場所となり、溪流沿いには「五份上溪図」という訪れる価値のある人文景観もあります。

それは長さ 200 メートルのモザイクで焼成した作品です。この巨大な作品を見ながら、百年前のこの地の春耕、夏耘、秋収、冬藏の農家生活、そして石炭を採掘した後に五分吊橋を經由して南港に運ばれる風景を想像することができます。最初は漫画でデビューした顔松涛は、事情により 10 年間隠されていて、復帰後、油絵という形で台湾各地の郷土風景を描きました。この『五分上溪図』は、顔氏が無償で手掛けて、何度も訪問調査と修正を経て、半年かけて下絵を完成させました。その後、内湖社区大学、東湖国中、康寧護專などの学生がリレーに色をつけ、皆が一心協力して完成させました。昔、あなたはただ通り過ぎる通行者だったかもしれませんが、ここに来れば、この地元の、そして地元から生まれた芸術作品をじっくりと鑑賞することができます。



## 南港茶葉製造示範場

今日は南港を訪れ、先人たちが開墾した足跡を探し、内山に向かいます。細雨が降り続き、風に従って曲がりくねった道を進みます。大坑溪を境に、一方は旧荘、もう一方は汐止です。「旧荘」はかつて南港区の八大庄の一つでした。清朝に多くの人が安溪から移住してきて、そのうち茶農家が太宗を占めていました。王水錦と魏静時は当時最も重要な茶師であり、南港栳寮一帯は台湾包種茶の発源地でもありました。

雲霧が立ち込め、茶園の間を行き来し、山城には淡い香りが漂っています。ここはかつて台湾で最も重要な茶葉、鋤業、桂花の産業ルートでした。道沿いにはまだ伝統的な赤レンガの古い民家が残っており、当時の茶の生産の盛況を想像することができます。今となっては感嘆するしかありませんが、栳寮が世間離れの人間の仙郷になりました。

茶葉示範場に入り、茶師が語る清朝の茶栽培と製茶の文化的背景を聞きます。文化ルートは再び南港庄から大稻埕へと運ばれ、茶葉産業の輸出貿易として、台北の経済繁栄を牽引しました。ここは原産地の主導者として、過言ではありません。

心の浮き立ちがここでゆっくりと落ち着きます。温かい包種茶を一杯差し上げ、自分の感覚を開放し、風味豊かな青心ウーロンをじっくりと味わいます。一口飲むと祝福があり、心身が満たされ、何事が「包中」になります。

## 台北パフォーミングアーツセンター 屋上星空ガーデン

台北パフォーミングアーツセンターは、多くの人々が見逃してしまう可能性のある国際的な観光地です。ご存知でしたか？アメリカのメディア CNN は台北のパフォーミングアーツセンターを年間最も革新的な建築物に選び、イギリスのメディア『ガーディアン』もそれを年間最優秀建築物と称賛し、さらに『タイム』誌の世界で最高の 100 箇所にも選ばれました。このような国際的な観光地は、国際的なチームによって設計され、国際設計コンペティションを経て、オランダのロッテルダムにある OMA (Office for Metropolitan Architecture) に引き継がれ、共同創設者でありプリツカー建築賞受賞者のレム・コールハース (Rem Koolhaas) が直接手がけました。コールハースの設計により、台北パフォーミングアーツセンターの地面層はまるで空中に浮かんでいるかのように見え、不思議でさえ幻想的な感覚を生み出します。

外壁の 1200 枚の曲面ガラスは、透明でありながら隠蔽されており、多国籍チームによって特別に作られました。また、3 つの劇場のうち 2 つは、普段は独立して運営されますが、連結すると 2300 席の大劇場に変身します。コールハースの説明によれば、そのアイデアは台湾の有名な鴛鴦鍋から着想を得たものです。また、訪れる価値があるのは、屋上にあるガーデン「星空の願い」です。その名が示すように、訪問者はここで星空を見上げたり、剣潭や台北盆地全体を俯瞰することができます。台北パフォーミングアーツセンターの運営チームもここで音楽会を開催し、観客に音楽と植物の共演を楽しんでもらいました。

## 政治大学/達賢図書館

インスタグラムで「台湾で最も美しい図書館」を検索すると、多くの人が共同で推薦しているのは、文山区にある国立政治大学達賢図書館です。常に観光客がここで写真を撮ってチェックインしています。

湖のほとりに位置する達賢図書館では、よくマガモの群れが湖で楽しそうに尾を振って水を漕ぐのを見ることができます。館内に入り、高い中庭に入ると、図書館全体の広さと明るさを感じることができます。1階から上を見上げたり、最上階から下を見下ろしたりすると、7階全体の壮大で美しい書棚を見ることができます。

あなたが知らないかもしれないことは、この図書館は「プレハブ工法」で建設されており、積み木のように、予め準備された建築構造を一つずつ組み合わせて完成させています。このような高度な国際レベル工法と技術は、なんと台湾の潤泰建設が一手に作られました。図書館の名前「達賢」は、寄付者の尹衍樑の先生であり、国内の企業管理の著名な学者である司徒達賢から名付けられました。政大の卒業生でなくても、ぜひここに来て本の香りを体験してください！

達賢図書館に行く前には、必ずインターネットで検索して入館の注意事項を詳しく読んでください。公共交通機関を利用する場合、自家用車で駐車する場合、または図書館に入った後の規則に関わらず、自己の秩序を保ち、他人の読書環境を妨げないようにすることは、基本的なマナーです。

## 西本願寺

現在の西本願寺広場は、休憩や観光の場所で、日本式の鐘楼が写真撮影に利用でき、広場の隣の「輪番所」（元々は仏寺の住持の宿舎）でお茶を飲んだり、和菓子を食べたりすることもできます。しかし、この一ヘクタールより少し大きい土地には、かつて 100 軒以上のトタンの家と木造家屋が混在しており、341 世帯がこの広場に詰め込まれ、同じ住所—中華路 174 号を共有していました。これらの住民は中国各省から来た人々で、中華民国政府に従って台湾に来た軍民です。彼らは権門ではなく、政府から政府が配給した家屋に入居できず、広場上の違法建築の入居者となり、急造の家に住むことになりました。最初は、彼らの多くが自分が台湾に来たのは一時的なことで、すぐに故郷に戻ると信じていました。しかし、1975 年 4 月 5 日の早朝、西本願寺の大火があり、その原因は今でも不明です。そして、台湾にいた 20 年、30 年の間に、多くの人が次世代を持ち、徐々に異郷で根を下ろすことを受け入れるようになりました。その後、都市再開発や都市美化に伴い、これらの違法建築はすべて取り壊され、住民は四散し、当時の痕跡は既に見ることができません。2011 年から、台北市政府は古跡を修復し、日本統治時代の「浄土真宗本願寺派台湾別院」の建築物の一部を復元し、今日の観光や休憩の場所となりました。